

# くらべて読もう

## —「すみれちゃんシリーズ」の並行読書を通して—

寛 理沙子

### 1. 課題意識

国語科では、自分が考えたことや感じたことを、よりよく表現できる「ことば」を獲得したり、よりよく表現できるように「ことば」を磨いたりすることが大切である。「ことば」を獲得したり、磨いたりするためには、読書が欠かせない。文部科学省「親と子の読書活動等に関する調査」(2004年)によると、本を読むことが好きな児童・生徒は85.6%もいる。しかし、1ヶ月に1冊も本を読まなかった児童・生徒は、小学生が5.4%、中学生が13.2%、高校生が47.7%もいるのである。本を読むのは好きでも、習い事や部活のため読書の時間が取れず、学年が上がるにつれて実際は本を読んでいない現状がある。

文部科学省の「これからの時代に求められる国語力について」では「読書は、国語力を構成している『考える力』『感じる力』『想像する力』『表す力』『国語の知識等』のいずれにもかかわり、これらの力を育てる上で中核となるものである。特に、すべての活動の基盤ともなる『教養・価値観・感性等』を生涯を通じて身に付けていくために極めて重要なものである。」と述べられている。読書を日常的に楽しむことによって、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」「国語の知識等」が身に付き、「ことば」を広げ、学びを拓くことができると考える。しかし、読書には個人差が見られ、家庭で1日に全く本を読まない児童もいれば、2時間以上も本を読む児童もいる。そこで、並行読書を行っている。単元を通して共通学習材だけでなく、関連する図書資料を並行読書することによって、本に触れる機会を多く与えるとともに、様々なジャンルの本を読むことによってより多くの知識や物の見方、考え方が身に付くと考えた。

### 2. 研究の視点

#### (1) 学習環境デザインのコンセプト

本や友達、自分と対話し、比べながら“成長”を感じ取る読みの学習

学習指導要領では言語活動の充実が謳われ、0次から含めて適切な単元を貫く言語活動を設定し、実の場へ生かされる授業単元作りを進めていくこと、つまり、課題解決過程で子どもたちに付けたい力を身に付けさせるようにしていくことが必要だと考える。そして、他者とコミュニケーションをとりながら課題解決をしていくことが、協働的に学びが生まれる言語活動につながるのではないかと考える。

そこで、本単元を貫く言語活動として「比べながら読む」ことを位置付けた。本単元で言う「比べながら読む」とは、主人公と自分とを重ね合わせ、想像を広げながら読んだり、文章の内容と自分の経験とを結び付けて主人公の成長について自分の思いや考えをまとめて発表したりすることである。自分と主人公を比べて読むことで、自分自身の成長にも気付けるのではないかと考える。

「比べながら読む」ためには、登場人物の行動や場面の様子から自分と重ね合わせながら想像を広げて読まなければならない。また、児童が自分の成長を振り返る際、容易に思い付くのは身体的な成長や「できたかできないか」という能力的な成長であるが、心の成長にも気付けるようにしたい。そのためには、登場人物の心の変化に着目し、自分の経験や気持ちと比べながら読み、登場人物の心の成長に気付いて自分の思いや考えをまとめて発表することが必要である。学習材には、自分よりも幼い立場にある妹を理解し、理不尽な対応にも優しく接することができるまでの主人公の心の葛藤も表されている。主人公と妹の気持ちのすれ違いから、心

が通い合うまでの心の動きを考えていくことは、自分自身と比べて読んだり、自分自身の心の成長にも気付いたりするきっかけとなるであろう。従って、本単元でねらう「場面の様子について、登場人物の行動を中心に創造を広げながら読むこと」（C読むことウ）と「文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと」（C読むことオ）を実現するのにふさわしい言語活動であると考えた。並行読書をしながらか、すみれちゃんと自分とを比べたり、他者と協働的な対話をしたりすることで、“成長”を感じ取る読みの学習を実現していきたい。

## (2) コンセプトを実現するための「メディア」とは

### ①並行読書

「すみれちゃんシリーズ」は、「すみれちゃん」、「すみれちゃんは一年生」、「すみれちゃんのあついなつ」、「すみれちゃんのすてきなプレゼント」の全4冊ある。「わたしはおねえさん」は、作者の石井睦美さんが教科書のための書き下ろしで書いたため、このシリーズの中には収録されていない。そもそも「シリーズ」とは、①1人の作家が書いたもので、主人公が同じもの、②主人公は異なるが、同一の作家が書いたもの、③作家も主人公も異なるが、読む対象を限定して読み手にふさわしいと考える作品を集めたもの、の3つに分けられると考える。第1学年では読書能力の発達段階を踏まえ、①のシリーズ作品（例：「ますだくんシリーズ」「がまくんとかえるくんシリーズ」など）を取り上げ、第2学年11月には②のシリーズ作品「レオ＝レオニシリーズ」を取り上げた。本単元で取り上げる「すみれちゃんシリーズ」4冊は①に分類されるが、昨年度学習したシリーズ作品と決定的に違う特徴は、このシリーズの主人公「すみれちゃん」が1冊ごとに幼稚園年長、1年生、2年生、3年生という設定で学年が1つずつ上がっていることである。シリーズで読むことによって、「すみれちゃん」の成長に気付くとともに、「すみれちゃん」の成長を体験することで自分の経験と結び付けながら読み進め、自分自身の成長にも気が付くことができるのではないかと考えた。「わたしはお姉さん」が2年生のすみれちゃんを描いた作品なので、「すみれちゃんシリーズ」の3冊目までは0次で全員読了しておき、4冊目は単元終了後に読み、どんな3年生になったのかについて思いを馳せると同時に、自分はどんな3年生になりたいかを考えるきっかけにしたい。

学習指導要領解説国語編の第5学年及び第6学年「C読むことカ」に「比べて読むこと」と書かれているが、ここには「比べて読むこと」は、「様々な違いを発見する喜びを知り、知識や情報を豊かにしたり、読書の範囲を広げたりすることにつながり、多くの本や文章などを読むことの意義や楽しさを実感させることになる。それは、読書を日常的に行う読書生活の構築にも役立つ。」と述べられている。本単元では、高学年になった時そこに到達できるように、0次から単元を通して並行読書をし、「すみれちゃんシリーズ」の1冊ごとに学年が1つ上がっていくという特徴を活用して、必要に応じて前のすみれちゃんだったらどうしてたかなど考えたり、「すみれちゃんシリーズ」を読み返してみたりすることで“成長”に着目して読み進めることができると考える。また、自分と主人公を比べて読むことで、自分自身の成長にも気付けるのではないかと考える。

### ②生活科との関連

本単元は、生活科「未来に向かって自分探検」と関連付けて学習を進める。具体的には、生活科で生まれた頃から現在までを振り返る「成長記録」を作成する。生活科で自分の成長を振り返るときに、“成長”を取り上げた本を読むことで自分自身の幼い頃の気持ちを思い出すことができる。本単元で現在の成長について振り返ったことが生活科の「成長記録」にも生かせると考える。また、文章の内容と自分の経験とを結び付けながら読むことは、中学年での「一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」や、高学年での「自分の考えを広げたり深めたりすること」につながっていく大切な入口となる。「自分なら…」「自分も…」と主体的に読む姿勢をもつことで、自分自身を掘り下げて自分の成長にも気付けるようにしたい。主人公の行動や気持ちを読むことで、これまでの自分を見つめ直し、これからの自分の姿を意識するであろう。本学習材は2年生の子どもたちなりに、文学から自分の成長を感じ取る読書の力を育むことができると考える。

### ③全文揭示、「成長マーク」、交流コーナー

協動的な対話ができるようにするために、成長ポイント（すみれちゃんが成長したなどと思う姿）を見つけたら、全文揭示に「成長マーク」（記名した矢印形の付箋）を貼る。そして、全文揭示を基に相手を決め、どうしてそこを成長ポイントにしたのか、自分もそんなふう成長したところはないかなどを交流する。そうすることによって、同じところを成長ポイントに選んだ児童同士で交流した場合、自分の経験や気持ちと結び付けながら読むことで「自分も…」 「自分だったら…」 というその児童なりの思いが現れ、具体的なエピソードが異なることに気付くことができる。違うところを成長ポイントに選んだ児童同士で交流した場合、自分では気付かなかった新たな成長を発見できると考える。

## 3. 授業の実際

### (1) 単元名・学習材名

単元名 くらべて読もう

学習材名 「わたしはおねえさん」（光村図書2年下）、「すみれちゃんシリーズ」（石井睦美・作 黒井健・絵）

### (2) ねらい

- 等身大の人物が描かれた物語を、自分の体験や気持ちと結び付けながら興味をもって読もうとしている。（国語に関する関心・意欲・態度）
- 登場人物の行動や場面の様子から想像を広げて読んだり、登場人物の心の変化に着目して自分の経験や気持ちと結び付けながら読み、登場人物の心の成長に気付いて発表したりすることができる。（読む能力 ウ・オ）
- 主語と述語の関係に気を付けて文章を読んだり書いたりすることができる。（言語についての知識・理解・技能 イ（カ））

### (3) 授業の分析・考察

#### ①学習指導計画（全8時間）

0次：「すみれちゃんシリーズ」を読む。生活科で自分の成長を振り返る。

第1次：生活科の学習を想起し、自分がお兄さん・お姉さんになったと思うことを話し合い、学習の見通しをもつ。

…1時間

第2次：「わたしはお姉さん」や「すみれちゃんシリーズ」を、すみれちゃんの行動や場面の様子から、想像を広げながら読む。すみれちゃんの言動と自分とを比べながら読み、すみれちゃんの心の成長について発表する。

…6時間（本時4／8時間）

第3次・活用：自分自身の成長について話し合う。生活科で「成長記録」を書く。…1時間＋課外

#### ②本時の様子と考察

##### ○本時の目標

すみれちゃんの行動や場面の様子から想像を広げて読んだり、すみれちゃんの心の変化に着目して自分の経験や気持ちと結び付けながら読み、心の成長に気付いて発表したりすることができる。

##### ○本時の学習

「わたしはおねえさん」を微音読し、すみれちゃんと妹とのかかわりの中での成長ポイントを見付け、発表し合う学習を行った。

まずは授業の前半で、自分で成長ポイントを見付けた。見付けたら教科書にサイドラインを引く。全文揭示に「成長マーク」を貼る。ノートにすみれちゃんの成長ポイントと自分の経験や気持ちなどを書く。全文揭示を手がかりにして相手を決め、ペアになって交流コーナーで交流をする。これら一連の活動は自分でどれから始めてもよい。したがって、自分で成長ポイントを見付け、ノートにすみれちゃんの成長ポイントと自分の経験や気持ちなどを書き終わってから交

流する児童もいれば、自分で成長ポイントが見付けられない、迷っている場合先に交流して友達の意見を参考にしながら自分なりに成長ポイントと自分の経験や気持ちなどをノートに書く児童もいた。成長ポイントはたくさん見付けてよいが、その中でも一番自分と比べたいものを選び、その叙述の部分に「成長マーク」を貼った。(図1) そうすることによって児童なりにどこに「成長マーク」を貼ろうか考え、「どうしてここにしたの?」「自分もこういうことなかった?」などと交流し合う協働的な対話が見られた。(図2) また、「わたしはおねえさん」の叙述だけを根拠にするのではなく、前のすみれちゃんだったらどうしてたかなと考えることで、すみれちゃんの成長に気がつけるようにした。前のすみれちゃんの様子も参考にできるように、「すみれちゃんシリーズ」を教室内に置いておき、(図3) 自由に手に取って読めるようにしておいた。

この部分は  
公開に適さないため  
掲載できません。

図1

この部分は  
公開に適さないため  
掲載できません。

図2

そして、授業の後半では全体で自分が見付けた成長ポイントを発表し合った。本時では、まだ迷っていたり決められなかったりする児童もいたので、なるべく多くの成長ポイントを発表し合った。例えば、C1は「けしかけて、でもけすのをやめた」という叙述を選んだ。「1年生のすみれちゃんだったら作った粘土を壊されてけんかになってたから、きっとこのノートの落書きも消していたけど、今のすみれちゃんは消さないで優しくなっているからここにしたよ。」と理由を述べた。これは、「すみれちゃんシリーズ」を並行読書していたからこそ気付いた成長ポイントである。また、C2は、「半分ぐらいなきそう、もう半分はおこりそう」という叙述を選んだ。「自分も弟にゲーム機を壊された時に同じような気持ちになったことがあって、その時しょうがないなと思った」と自分の経験を語った。C3は、「何よ、これ」という叙述を選んだ。「すみれちゃんは怒っているんだけど、手を出すのを我慢していて、私もおやつが7個だった時に弟に4個あげて自分は3個にして我慢できた」と自分の経験を語った。この児童達は、自分と比べながら読むことができていた。それを聞いていた児童も「ああ。分かる、分かる。」と共感し、文学を通して自分の成長に気付くことができた。

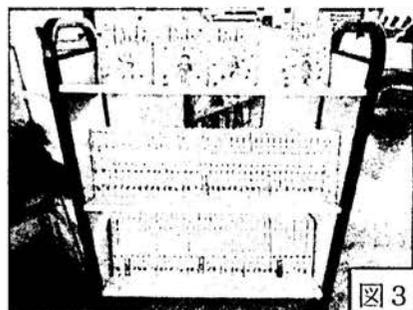


図3

#### 4. まとめ

0次で並行読書として朝学習の時間などを利用し、「すみれちゃんシリーズ」を読み聞かせした。(図4) それによって、自分で本を読み進めることが苦手な児童も「すみれちゃんシリーズ」の内容を把握することができた。自分で本を読み進められる児童は、興味・関心が高まり、再度自分で本を手にとって進んで読む姿も見られた。読書の日常化への第一歩が踏み出せたのではないだろうか。休み時間には自分達で考えた「すみれちゃんごっこ」という遊びを楽しんだり、お話の中に出てくる「それは世界が謎に満ちているからだ」という言葉を日常生活の中で使ったりして、「すみれちゃんシリーズ」が大好きになっていったので、本単元を行った価値は高い。また、等身大のすみれちゃんに対して、児童自身もきれいごとを言わずに自分自身を掘り下げて自分の言葉で自分の経験を語ることができていた。これは、生活科と関連させたからではないかと考える。

この部分は  
公開に適さないため  
掲載できません。

図4

一方で、課題もある。交流に関して、協働的な対話はできていたかもしれないが、交流する目的が少し弱かったのではないかというご指摘をいただいた。生活科との関連をもっと打ち出して最終的に自分の「成長記録」に自分の成長を書いていくので、交流の目的も自分の「成長記録」に書くためにはどの成長ポイントにしたらいいか、自分の経験はこれでいいかという観点で交流していくとより交流が深まったのではないかと考える。今後は交流についてより研究していきたい。